ある物語　それぞれの東日本大震災

復興果たしてこそ恩返し

人と物資であふれる 避難所で苦悶の日々

「せっかく来てもらって申し訳ないけど、今夜の寝るところはないです」

うっそうと長く伸びた髪の毛とひげに覆われた顔で、ジーパンのようなものをはき、恰好はヒッピーを想起させる。声は疲れ切っていた。「この人は大丈夫か？　本当に職員なのか？」。森泉隆夫は思った。2011年3月11日に東日本大震災が発生してから1ヵ後の4月11日の夕方。宮城県気仙沼市の避難所の一つ、階上中学校に自治労の復興支援ボランティアとして長野県から支援に駆けつけた同県職員の森泉は当時の現場責任者として現れた畠山勉からそう言われた。

「とりあえず、車中で寝るんで、車を停めるところだけ教えてください」。ボランティアは自給自足が原則だ。リュックサックに携帯の食糧などひと通りのサバイバルグッズを詰め込んでいた森泉は、自治労が借りたハイエースを体育館の裏に停め、他の支援者とともに車中で泊まることにした。これから一週間。「何をやろうか」。翌日に備え、森泉は考えていた。

§　§　§

この頃になってそれまでは、気を張り詰めていたため感じていなかった疲れがドンと反動となって表れ、畠山を襲っていた。避難所である体育館は多くの避難者と山のように集まった救援物資でごった返している。足の踏み場もない。次から次へと物資は届くが、置き場所などない。どうすればいいのか。物資の受け入れ担当でもあった畠山は頭を抱えていた。避難所内を歩き始めると「あれがほしい」と一人、「これがほしい」とまた一人から頼まれごとを受け、何をしようとしていたか思い出せなくなる。完全にオーバーフロー状態だった。「決して他の担当者が何もやっていないわけではない。他の担当者は別の部分で苦闘していた」。「少しえらそうな言い方かもしれませんが」と前置きして謙遜した。

▲当時の記憶をたぐりよせ、ときおり言葉をしぼり出すように畠山勉さんは語っていた

震災発生時、畠山は市役所の1階にいた。激しい横揺れが起き、庁舎内は停電。津波は一部の庁舎の1階部分：160㎝まで到達した。空が暗くなる頃、庁舎の一ヵ所に集められた職員たちに「土地勘のある者が地元に歩いてでも確認してこい」という調査の指示が副市長から出た。無事だった自分の車に職員数人を乗せ、階上中学校にむかった。自家発電なのか電気がついた体育館と校庭には人と車があふれていた。人々は津波にのまれながらもなんとか逃げ、服が濡れたたちに中学生が服を貸すなどしていた。状況を報告するため、いったん、一人で市役所にとんぼ帰りをしたのを最後に、中学校に寝泊まりし続けることになった。自宅は被災し、帰れる場所はない。上司はいないが立場上、畠山は避難所の現場責任者として運営にあたることになった。

避難所がある地区は普段から人の付き合いがあり、自営業の人が多い土地柄だ。大工や電気屋で働く人などがいた。リーダーの役割は地元出身者である守屋守武市議（当時）が果たし、地元の人たちがそれぞれの得意分野で自主的に避難所運営に携わっていた。

「皆さん今日もがんばっていきましょう」とあいさつをする守屋市議を囲み、畠山やボランティアなど運営側による毎朝のミーティングが始まった。給油班、食事班、救護班などがお互いの状況を確認し合う。

畠山にとっては、何十人のボランティアが目の前に行列をつくって「何でもします」と言われることは、かえって負担で目まいがする思いであった。やる気がある人たちに仕事を分担できない。最優先事項が同時多発的に発生しており、指示する側の自分も混乱していたのだ。

「みんな狭そうなところにいるなぁ。畠山さん、これ全部片づけちゃおうよ」

「動かしたいとは思っているのですが、やっていただければありがたい」

どんどん運び込まれてくる物資の保管場所はない。しかし、捨てるわけにもいかず、ただ置いておくわけにもいかない。体育館の奥の方に積んでその場をしのごうとするが無理だった。

すぐさま森泉は、現地の対策本部長だった自治労の軍司輝雄副委員長（当時）に電話で、避難所の状況を説明し、梱包資材を大至急送ってもらうようにお願いした。

§　§　§

大量のダンボールが届いた。「畠山さん、全部開けよう」。森泉は畠山に相談した。「すべての箱を開け、物資を必要なものとそうでないものに選別し、そのデータベース作（↖）

▲2011年5月12日、階上中学校体育館にて鎌田さんの取材に応える畠山さん（『自治労通信』2011年7・8月号7頁より）

力をあわせて、乗り越えよう！

謹んでこのたびの災害のお見舞いを申し上げます

被災された皆さまへ

心よりお見舞い申し上げます。
一日も早い復旧を心からお祈りします。

被災者を支援される皆さまへ

支援・復旧活動にあたっては、
くれぐれも健康・安全にご留意ください。

総合共済　住まいる共済（全労済の 火災共済・自然災害共済）　団体生命共済　マイカー共済（じちろう）

ZENROSAI NEWS 5118W003

全労済 全国労働者共済生活協同組合連合会
自治労共済本部
全日本自治体労働者共済生活協同組合

全労済は、営利を目的としない保障の生協として共済事業を営み、組合員の皆さまの安心とゆとりある暮らしをめざしています。出資金をお支払いいただいて組合員になれば、各種共済をご利用いただけます。

ある物語　それぞれの東日本大震災

気仙沼と長野 つながる思い 感謝の気持ち 7年あたためて

2面から続く

成もこっちがやるから」と引き受けた。

「長靴、肌着、靴下。子ども用に男性用。とにかくいろいろなものが届いた。中には『正直、こんなものどうすればいいのか』と思うものもあった。長靴のサイズでは約20㎝の小さいサイズと約30㎝の大きいものはあるが、真ん中のサイズが抜けている。どうみても不良在庫と疑ってしまう。バスケットボールやサッカーボールまでもが届く。送ってくれた人の気持ちは重々承知しているが、今すぐに使わない。寝る場所をつくることが最優先だ。衣服は山のように届いたが、寝具が足りず、冷たい床に直接寝ていた」と森泉は振り返る。

箱を全部開けて、詰め直す。マジックで箱の表に中身がわかるように書く。詰め直した物資はハイエースに詰め込み、近くの農業関係の事務所や倉庫など、さまざまな場所に運んだ。ひたすら物資の整理整頓と運搬作業にあたった。どこに何が置いてあるかをすべて帳簿に記した。畠山が避難者から困りごとを聞く中で、依頼された物を森泉が探し出したりもした。畠山は他の避難所との連絡のやりとりもしていた。森泉が毛布10枚、20枚を階上中学校に運搬したこともあった。

救援物資とは別に、すぐに使わない「記念物資」に対し、森泉は申し訳なさを感じながらも仕方なく処分するしかないと考えていた。しかし、畠山は「それでも善意だからできれば保存しておいてほしい」と言った。それらすべてを避難者の皆に配れるように、別の広い会場に運び込み、誰でも自由に持ち出せるように整えることにした。森泉が支援を終えて長野に帰るころには、物資は避難所ではなく、別の場所に設けられた集積所に集まるようになった。

§　§　§

森泉は7年前の3月11日、横浜のホテルで行われていた自治労春季現業セミナーに参加していた。地震で揺れを感じたのは藤本初雄現業局長（当時）が阪神淡路大震災の話題に触れているときだった。集会は中止。会場の横にあった大型のテレビで各地からの参加者とともに仙台空港が水浸しになる映像を目にする。集会参加者が「あそこ知ってる場所だ、うそー」「きゃぁー」とわめき、泣き崩れた。無事に地元の長野に帰れたら、「俺も何かやらなければ」と決めた。自治労がボランティア支援を行うことを聞きつけると、真っ先に手をあげた。

無力感をバネに支援に没頭

「せっかく被災地に来たんだからどんどん支援をしたいじゃん。何もしないで帰るなんて嫌じゃん」。とどまることなく仕事が飛び込む畠山の負担をなるべく軽くするのが自らの役目だと思っていた。森泉が支援に入り、3、4日たった頃の朝方。縦に切ったドラム缶を横に並べて、火を起こして周りに集まるお年寄りたちの姿があった。たばこを吸いながら「俺はなぁ、船も、家も、女房も流されちまった」。一人の高齢男性が誰に聞かせるわけでもなくぽつりと言った。森泉は下をむいたまま涙がとまらなかった。「自分はボランティアで来たのに、なんて無力なんだ」。男性の言葉を聞いてからは、目の前の状況に対して何とかできることをしたいという思いをさらに強くした。とにかく動いていないとやってられなかった。

§　§　§

2018年2月9日。『自治労通信』の企画でルポライターの鎌田慧が7年後の被災地を再訪する旅に私（記者）は同行した。鎌田が再会した被災者のうちの一人である畠山へ取材する傍らで私は話を聞いていた。混乱期のうろおぼえな記憶を何とか思い出しながら、7年経った現在の状況について、畠山はインタビューに答えていた。

『「復興が遅い」とマスコミや住民からお叱りの声を受ける日々。3年後には復興創生期間が終わる。果たしてそれに間に合わせることができるのか。通常業務に加え、震災復興に地方創生。決してなまけているわけではない。他自治体から職員が支援に来てもらっていながら自分たちが休んでいるわけにはいかない。あと3年間はマラソンでいうところの心臓破りの丘が続くことを覚悟している」と復興に明け暮れていることを話していた。深夜帰りで休める日はほとんどなく、心身はギリギリの状態だった。そのような状況にもかかわらず、震災後、なんとか日々の業務にあたってこられているのも、震災直後の一番大変な時期に多くの人たちからの支援を受け、「復興を果たすことでかつての支援への恩返しをしたい」という思いに支えられているからだ。「記憶がうろ覚えで申し訳ないが、自治労の復興支援が始まった頃に支援の土台をつくってくれた人がいて。その人にまだお礼が言えていない。確かモリワキさんだったか…」。当時、酷使した畠山の携帯電話は壊れ、データはすべて飛んでしまった。

鎌田に同行する数日前、被災地を再訪する企画で東北に行くことを私が職場のとある先輩に話したときのことだった。その先輩は7年前、自治労復興支援のボランティア派遣者の取りまとめを担当していた。派遣が終了した後、「ボランティアで来てくれたあの方は誰であったのか」と何度か問い合わせを受け、探し出そうとした経験があったことを聞いた。「お互いがまたつながりあえたらいいよね」。先輩の純粋なその心の持ちように感心させられた。

畠山がインタビューで話していた内容を心に留めながら東京に戻った私は先輩に検索をお願いした。結果、畠山が感謝の意を伝えたいと思っていたのが森泉と判明。畠山に探していた人は森泉であることを伝え、二人に取材を申し入れて約7年半前に二人が奮闘する姿を書くことになった。

§　§　§

2018年2月19日、森泉の携帯電話が鳴った。

畠山「ごぶさたしてます」

森泉「ごぶさたごぶさた。俺の携帯にはまだ登録残ってるんだよ。どうしたの？」

畠山「お礼もちゃんと言えてなくて」

森泉「全然気にしてないから。ボランティアだから、かえって恐縮しちゃうからいいんですよ」

畠山「そういえば小平奈緒さん、優勝おめでとうございます」

森泉「ハハハハハ」

二人はお互い照れくさそうに「声」で再会した。お互いを思い出すのには多くの言葉はいらなかった。畠山は森泉に電話をかけ、約7年もの間、持ち続け、伝えたかった感謝の気持ちを告げた。

「気持ちいいなぁ」

畠山にとってはおよそ10日ぶりの入浴だった。ゴルフ場がお風呂を貸してくれることになった。昼間からのろのろとしたお湯だった。あのときの畠山の言葉を森泉は忘れられない。

§　§　§

私が畠山に取材したのが7月10日。西日本を豪雨が襲った後だった。「助けてもらっていながら、助けに行けないことが心苦しい」。「でも今は自分の地域の復興にまい進しなければならない」と、歯をくいしばりながら今も業務にあたっている。

森泉は現在、管轄する長野県の東信地方で、道路と付随施設に異常がないかパトロールに回り、補修作業などにあたる。これまで、山が崩れる、川の堤防が決壊するといった瞬間を目の当たりにしてきた。災害は起こってしまったらどうしようもできない。しかし、その前に何ができるのか、事前のセーフティネットをどのように担保するのかを考え、仕事にむきあっている。

※本文中、敬称略

▲支援に入った頃の状況を休むことなく森泉隆夫さんは話し続けた

▲道路わきの草刈り作業を行う森泉さん（本人提供）

取材・文・写真

ラム　レベッカ
（自治労本部　総合企画総務局報道担当）
2012年入局。政治政策局（社会福祉評議会担当）、財政局などを経て2017年9月から現職。『自治労通信』（2018年3・4月号）では「特集　東日本大震災から7年　～あの日を忘れない～」を担当した。